



# 石神井南中学校 学校だより

令和 2 年度 第 1 号  
発行日 4月10日(金)  
練馬区立石神井南中学校  
校長 田 邊 克 宣

『 令和 2 年度の幕開けです！ 』 校長 田邊 克宣

人はいざという時に試される。

そしてそれは、往々にして、普段やっている行動がそのまま表れるものです。

「 習い性となる 」 と言います。

普段の生活で、特に意識することもなく行っていることが、いつの間にかその『 ひととなり 』を形作っていく。まして、こうしたい、こうなりたいと思って行動するならば、なおさらその意識は人格形成に大きく影響を及ぼしていくことでしょう。そうして日々、子供も大人も、心身ともに変容しながら生きていく人生において、多かれ少なかれ、いざという時が訪れるものです。

それが個人的なことではなく、今回のように、社会的に、それも世界規模で生じている状況は、まさに、人としての在り方が試されているのだと思います。

犠牲となられた方々に対して、自分であったかもしれないという思いをもつと、ご冥福をお祈りするとともに、自ずと今、自分がやらなければいけないことの重さを痛感します。

命を守るための行動は、どうあるべきか。

第二次世界大戦を、今の中高生の時代に過ごした母は、口癖のように、「あの時のことを思えば、大概のことは我慢できる。」と言っていました。

外に出れば爆弾が落ちてくる、家にも食べるものがない、娯楽などはもつてのほか、生きるための術が何一つ揃わない世界。戦争を生き延び、高度成長期の真ただ中で囲んだ家族の食卓で、よく「戦時中はフスマまで食べた。」と話していました。子供心に「襖まで」と感じ入っていましたが、これは『 藪 (ふすま) 』〔 脱穀した小麦の皮。牛馬の飼料 〕 のことだと教えられ、いずれにしても食べ物の大切さを事あるごとに聞かされていました。

9年前の東日本大震災の折は、私の住む地域は街灯が全て消え、暗闇の早朝に、自転車で片道2時間以上をかけて職場へ通っていました。店頭からは、パンも電池もなくなり、さてどうしたものかと思案に暮れたものです。しばらくの辛抱で、東京は日常を取り戻し、今に至っていますが、まだまだ復興途上の地があることは周知の事実です。

今、自分と、他者の命を守るために、一人一人がとるべき行動は、自粛ではありません。生きるために、最優先・最大限に考えるべきことです。

石南中生の諸君は、今、君たちが、毎日きちんと食事をし、課題に取り組み、しっかりと睡眠をとることが、やがて新型コロナウイルスの猛威が収まったとき、再び日常生活を元気にスタートさせるために必要な行動だと理解してください。外に出て散歩やランニングをすることも、心身を健康に保つために有効です。私は家で素振り・筋トレ・ストレッチを行っています。全ては、自分と他者の命を守り、いずれ必ず来る、学校再開の日に向けての準備です。

今しばらくは、我慢の時。

でもそれは、明るい未来を信じての、主体的で、積極的で、意欲的な行動です。

新入生と、保護者の皆様は、延期となった入学式を楽しみに待っていてください。在校生諸君と保護者の皆様は、学校が再開した折に、よりスムーズにスタートできるように、家庭でできる限りのことをしておいてください。でも決して無理はしないでください。何か心配なことがあれば、遠慮なく学校に相談してください。

では、石南中生の頑張りを信じ、期待しています。学校と、家庭と、地域で、この難局を乗り越えていきましょう。